

## 16 詩人大使：ポール・クローデル

ポール・クローデル（1868-1955）は、彫刻家の姉カミーユの影響で、早くから日本に関心を持ちました。日本に行くための近道として、外交官の道を選んだとも言われています。



Paul CLAUDEL  
ポール・クローデル

クローデルは、1921（大正10）年から1927（昭和2）年までの間、フランスに帰国していた1年間を除いて、約4年間にわたって駐日大使を務めました。日本滞在中は、外交官としての仕事を続けながら、執筆活動も続けたことから、当時の新聞は彼のことを「詩人大使」と呼びました。

クローデルを研究している日本人学者によると、クローデルは「共同出生 (co-naissance)」という独自の理論を持っていたと言います。「永続的な関係を結ぶには、相互の利益に基づく関係でなければならない」というのが、彼のモットーでした。

クローデルが本国から与えられたミッションには、武器や航空機を始めとするフランス製品を日本に売り込むことや、日本におけるフランス語の普及がありました。クローデルは、「共同出生」の考えに基づいて、フランス語を教育するだけでなく、日仏の研究者の交流の場を創設したいと考えました。この考えに賛同した実業家の渋沢栄一（<https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100282937.pdf>）は経済的支援を惜しまず、1924（大正13）年に東京に日仏会館が開館しました。また、京都には1927（昭和2）年に実業家の稲畑勝太郎の協力により、関西日仏学館（現在のアンスティチュ・フランセ関西とヴィラ九条山の前身）が設立されました。

日仏両国の間で相手国の文化に関する優れた研究成果に対して贈られる「渋沢・クローデル賞」という学術賞があります。相互理解を深めることを大切にされたクローデルの名前に相応しい賞と言えるでしょう。

掲載日：2022年6月3日